様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１２９８３

研究課題名（和文）「がん哲学外来」を基盤にした「がん教育・対話学」の確立

研究課題名（英文）Establishment of "cancer education and dialogue" based on "cancer philosophy"

研究代表者
樋野　興夫（Hino, Okio）

順天堂大学・医学部・教授

研究者番号：９０１２７９１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：申請者の所属する順天堂大学のある文京区の小学校・中学校での「がん教育」と文京区の小学校教員対象講習会を順天堂大学にて開催し、文京区にて「がん教育」を行うシステムを確立した。さらに、毎年一回、文京区と共催でがん教育シンポジウムを開催し、市民・学校・大学が協力して「がん教育」を行えるようなシステムの構築に向けた活動も行った。同時に、文京区教育センターとともに「小学校がん教育検討委員会」を立ち上げ、小学校でのがん教育指導資料「文京区モデル　小学校におけるがん教育」を作成し、区内の小学校検証授業を行うことで、今後、小学校の授業にて使用することのできるがん教育の指導資料を完成させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
がんは国民の約半数が罹患し、3人に1人が何らかのがんにより死亡していることから、がん教育のさらなる普及を目指した学術的な基盤の構築と全国的なネットワークの構築が必要とされてきている。本研究は、「がん哲学外来」創始者である申請代表者を中心とし学術的基盤を持った大学を中心に、日本人の文化的背景を考慮した方法によりがん患者とその家族、医療者の間でのコミュニケーションのあり方の基盤が構築された。さらなる「がん教育」の推進は必須ではあるが、現状では普及への障壁を多く抱えている患者支援ネットワーク構築への一歩となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：We established "cancer education system" in Bunkyo hold "cancer education" at elementary and junior high schools in Bunkyo and a seminar for elementary school teachers in Bunkyo at Juntendo University. In addition, we held a cancer education symposium jointly with Bunkyo once a year, and also worked to build a system that citizens, schools, and universities could cooperate to carry out "cancer education." At the same time, we created instruction of cancer education in elementary schools "Bunkyo model cancer education in elementary schools" together with the Bunkyo Education Center. We have established "cancer education system" and completed teaching materials for cancer education that can be used in elementary school in the future.

研究分野：病理学

キーワード：死生観の教育　がん教育　がん哲学外来

１．研究開始当初の背景

申請者は、2005 年の「クボタショック」の直後、日本で初めて「アスベスト・中皮腫外来」を開設し、早期発見・治療を目的とした検診体制の構築を行ってきた。一方で、「アスベスト・中皮腫外来」開設時には外来に出向き、患者に接し、医療者と患者の「対話」の重要性を再認識することとなった。同時に、治ることが難しい患者さんが、心安らかに充足した日々を送り、穏やかな最期を迎えるために、医師や治療にかかわる者に何ができるかを考えたときに、自ら人生や死について考えるための支援、いわゆる「哲学的なアプローチ」が必要だとの思いに至った。さらに、国民病として認識されるようになった「がん」ではあるが、患者や国民の視点に立ち「がん」を知り・学ぶ場は十分に整備されていない。そのため、自分自身又は家族など身近な人が「がん」に罹患した時に初めて死というものを意識し、それと同時に、自分に向き合い、死について真剣に考えることとなる。一方、医療現場では患者の病状や治療の説明をすることに手一杯で、がん患者やその家族の精神的苦痛までを軽減させることができないのが現状である。

そこで、医療現場と患者の間にある「隙間」を埋める「哲学的なアプローチ」実践、そして「対話の場」として 2008 年に開設されたのが「がん哲学外来」である(*NNN ドキュメント'14「がん哲学外来、それは言葉の処方箋」日本テレビ 2014 年 10 月 5 日放映, every 特集「がん哲学外来」日本テレビ news every 2014 年 6 月 10 日放映*)。がん患者は「がん」と共に生きていく上で、病気を治すことだけでなく、人とのつながりを感じ、尊厳を持って生きることを求めている。その表れが、一般的ながん相談やセカンドオピニオン相談ではなく、対話型外来の「がん哲学外来」を自ら選択して訪れる患者がいることである。実際、順天堂大学で、2008 年 1 月から 3 月の間の 5 日間、「がん」について患者と語り合い、相談にも乗る「がん哲学外来」を試行的に開設したところ予約が殺到し、30 分から 1 時間程度のわずかな面談時間にも関わらず満足し、笑顔を取り戻した患者・家族も少なくなかった。現在も「がんであっても尊厳を持って人生を生き切ることのできる社会」の実現を目指し、一人でも多くのがん患者が、患者、その家族、そして医療従事者など職種に関係なく、垣根を越えた様々な方と集い、寄り添い、がんについて学ぶ場の提供を続けている（*<巻頭特集> 仕事インタビュー私の職務経歴書「がん哲学外来」創設者　樋野興夫の場合、宅ファイル便　2015 年 10 月 19 日掲載*）おり、全国約 150 カ所以上で開設されているにもかかわらず、「がん哲学外来」の更なる開設を求める声が寄せられている。つまり、国民病として認識され始めた「がん」を通して、医療者の立場からの知識提供だけではなく、「哲学的なアプローチ」を加え、様々な分野の人が垣根を越えた対話を通して人生の意義に触れることのできる「がん哲学外来」の全国への拡充は、次世代の新たな学問、「がん教育学」・「対話学」や患者の視点に立った「次世代の医療の場」の確立に繋がると考えられる。

２．研究の目的

がんは国民の約半数が罹患し、3 人に 1 人が何らかのがんにより死亡している。近年、国民病として認識されはじめた「がん」ではあるが、いまだに「がん」は死に直結する怖い病気であるというイメージから、多くの人が「がん」と宣告されると混乱し、治療法などをきちんと選択をすることができない現状がある。さらに、現在の医療は、医療者中心で、患者の視点が、依然、不足している。加えて、医療現場では患者の病状や治療の説明をすることに手一杯で、がん患者やその家族の精神的苦痛までを軽減させることができないのが現状である。

そこで申請者は、2008 年、順天堂大学において、医療現場と患者、そしてその家族の間にある「隙間」を埋めるために「がん哲学外来」を開設し、「がんであっても尊厳を持って人生を生き切ることのできる社会」の実現を目指し、一人でも多くのがん患者が、患者、その家族、そして医療従事者など職種に関係なく、垣根を越えた様々な方と集い、寄り添い、がんについて学ぶ場の提供を続けている（*<巻頭特集> 仕事インタビュー私の職務経歴書「がん哲学外来」創設者樋野興夫の場合、宅ファイル便　2015 年 10 月 19 日掲載*）。開設以降、全国で「がん哲学外来」の設置を求める声が高まっており、さらなる普及を目指した学術的な基盤の構築と全国的なネットワークの構築が必要とされてきている。

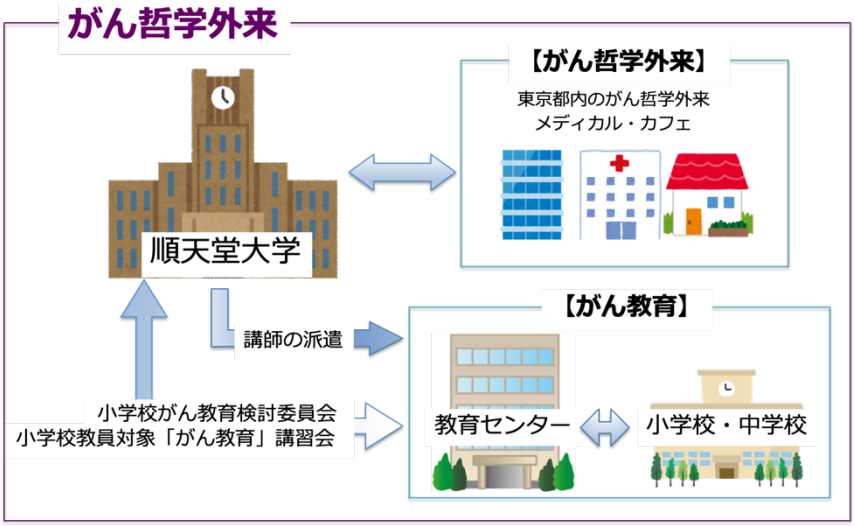
「がん哲学外来」は現在まで全国約 150 カ所への広がりを見せている。同時に、「がん哲学外来市民学会」の開催や「がん哲学外来コーディネーター」養成を行い、「がん哲学」の質を担保するための仕組み作りも行なっている。各地へのさらなる「がん哲学外来」の開設のためには、患者の視点に立ち、利便性と安全性を兼ね備えたネットワークの構築が必要である。そこで、本研究では、申請者の所属する順天堂大学が主幹校となっていた、がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「ICT と人で繋ぐがん医療維新プラン」にて構築され、実績のあるシステムを活用して「がん哲学外来」を行い、「純度の高い専門性と社会的包容力」を基軸とした、「がん哲学外来」の普及に資する。

３．研究の方法

申請者の所属する順天堂大学が中心に「がん哲学外来」を行い、全国への開設推進のために必要な要素の抽出と質を担保するための学術的な基盤構築目指す。加えて、文科省が推進するがん教育のため、「がん哲学外来」を基盤とし、患者の視点に立った「がん教育」の基盤構築を行う。

1. 生涯学習の場としての「がん哲学外来」の基盤構築
2. 「がん哲学外来」を基盤とした「がん教育」プログラムの基盤構築

平成 24 年度から政府が主導する新たながん対策推進基本計画が スタートし、平成 28 年度までに学校での教育の在り方を含め、健康教育全体の中で「がん教育」をどのようにすべきか検討し、平成 29 年度から学校教育全体の中で「がん教育」を推進することが決定されている。「がん教育」は「がん」に対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識及び命の大切さに対する理解を深めることが目的である。申請者は、現在まで小学校、中学校、高校および一般市民に向けに「がん哲学に関する講演会」を行っており、現在ではがん教育推進に関する委員会の委員を務めるなど、がん教育推進の中心的な役割を果たしている。また、2015 年 10 月 21 日には申請者が中心となり、順天堂大学にてがん教育講演会「がん教育を進めるにあたって」を開催し、近隣の学校の先生、一般市民など多数の参加があった。そこで、本項目では、医師や医療従事者、大学協力のもと、学校の先生や生徒の保護者が「がんの知識」学ぶことのできる意見交換会・講演会・ワークショップを開催し、がん教育を推進するための基盤とそのためのツールの作成を行う。



1) 順天堂大学の医師による小・中学校でのがん教育授業の実施

申請者の所属する順天堂大学の所在地である文京区の小学校・中学校にて定期的に「がん教育」を行う。

2) 「がん教育」に向けた勉強会（定期的に開催）

「がん教育」を行う学校の先生と順天堂大学が定期的に勉強会を開催し、がん教育を行う先生が「がん」の最新の知識・情報を学び、それを基にした授業を展開できるようにする。さらに、医師や医療従事者が授業を見学する機会を設け、「がん」に関するフィードバックシステムを確立し、専門家監修による最新の知識をもとにした「がん教育」を継続的に行っていくことができるシステムの確立を目指す。

3) 「がん教育」プログラム作成

申請者が中心となり、大学協力のもと、2)を通して得たフィードバックを生かした「がん教育」プログラム作成を目指す。具体的には、生徒と関わる現場の先生と医師や医療従事者、および文京区教育センターが「がん教育」プログラム作成に関するワーキンググループを立ち上げ、地域の特性を生かしながらも全国の学校の授業で使用できるような「がん教育」のための指導資料を作成し、最新のがんの知識・情報を基にした授業を展開できるようにする。また、一年に一回開催される勉強会にて指導要領に関する意見交換を行い、定期的に更新し、最新のがんの知識・情報を元にした授業を継続していく。

４．研究成果

申請者が所属する順天堂大学の所在地である、文京区の小学校・中学校にて平成 28 年度(6 校)、平成 29 年度（14 校）、平成 30 年度（12 校）にかけて「がん教育」を行った。同時に、平成 28 年 7 月 28 日,平成 29 年 8 月 28 日，平成 30 年 8 月 28 日には文京区の小学校教員対象講習会を順天堂大学にて開催し、「がん教育」を行う小学校の先生ががんの基礎知識を学び、がん教育を行う際に必要な知識を身につけることのできる教育システムを確立した。

さらに、文京区と共催で平成 28 年 12 月 14 日，平成 30 年 1 月 29 日にはがん教育シンポジウム「『がん教育』について考える」を文京シビックホールにて、平成 30 年 12 月 3 日にはがん教育シンポジウム「がん教育を考える～医療機関と学校の連携～」を b-lab（青少年プラザ）ホールにて開催し、市民と学校、大学が協力して「がん教育」を行えるようなシステムの構築に向けた活動を行った。

また、平成 29 年度は文京区教育センターとともに「小学校がん教育検討委員会」を立ち上げ、区立小学校校長、教務担当主幹教員、体育主任、養護教員とともに、3 回（平成 29 年 5 月

22 日、平成 29 年 8 月 21 日、平成 30 年 2 月 13 日）の検討委員会を開催し、指導資料「文京区モデル　小学校におけるがん教育」を作成し、それらの資料を用いて、平成 30 年 7 月 3 日および 7 月 10 日に区立小学校にてがん教育の検証授業を開催し、その授業を元にした意見交換会において指導資料「文京区モデル　小学校におけるがん教育」の改定を行い、がん教育の指導資料として令和元年度より文京区内の小学校に配布される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

1. Hino O, Yan Y and Ogawa H: Environmental pollution and related diseases reported in Japan: From an Era of “Risk Evaluation” to an Era of “Risk Management”. Juntendo Med J 64:122-127, 2018
2. 樋野興夫：「遺伝病も単なる個性である社会構築を目指して～がん哲学＆がん哲学外来～」日本遺伝カウンセリング学会誌 38:41-45, 2017
3. Hino O and Kobayashi T. Mourning Dr. Alfred G. Knudson: the two-hit hypothesis, tumor suppressor gene, and the tuberous sclerosis complex. Cancer Sci, 118:5-11, 2017
4. 樋野興夫：「医療の協働体の時代に向けて～Medical Town & Village 構想～」日本心臓血管学会誌, 2016

〔学会発表〕（計 155 件）

1. 樋野興夫：がん哲学から生きる力の贈り物“ことばの処方箋”。がん診療に関する公開講座、平成 31 年 2 月 3 日、滋賀
2. 樋野興夫：地域医療連携の構築 -隙間を埋める- 。第 2 回日本地域医療連携システム学会、平成 30 年 12 月 24 日、千葉
3. 樋野興夫：環境発がんから臨床応用に至る広範ながん研究。第 77 回日本癌学会学術総会、平成 30 年 9 月 27 日～29 日、大阪

〔図書〕（計 10 件）

1. 樋野 興夫:がん哲学外来へようこそ,新潮新書
2. 樋野 興夫:明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい, 幻冬舎文庫
3. 樋野 興夫:いい覚悟で生きる:がん哲学外来から広がる言葉の処方箋, 小学館

〔その他〕
ホームページ等
http://www.gantetsugaku.org/

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：今井　美沙

ローマ字氏名： IMAI, misa

所属研究機関名：順天堂大学

部局名：医学部

職名：助教

研究者番号（8 桁）：50709003

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。